

個別事例を扱う質的研究における個と共同性
——他者理解におけるカテゴリーの越境とその意義——

The Individual and Communality in Qualitative Research with Single Cases:
The Significance of Transcending Categories on Understanding of Others

近藤 菜月
Natsuki Kondo

要旨

本論文は、個別事例を扱う質的研究の学術的意義を、個別性とカテゴリーの関係に焦点を置いて再考するものである。従来、質的研究では個別性をめぐる対立した見解が存在する。一方では個別事例から得られる知見は、属性集団に結び付けられることで一般化・普遍化が達成されるとされ、他方では、属性に還元されない個に着目する立場がある。後者に対しては、個別性の強調が共同性の構築や連帯を阻むのではないかという指摘がされてきた。これを踏まえ本稿では、岡真理の議論を参照しつつ、カテゴリーを越境する他者理解の可能性と意義を検討した。その結果、属性を同じくしない他者の経験を、自らに関わるものとして理解することが、「越境」を可能にする態度として示された。さらに「越境」には、ポストコロニアリズムやフェミニズムが提起したような、特定の構造的問題設定を共有する「当事者性の拡大」と、偶発性と不確実性を伴う「触発」を通した個と個の結びつきという、二つの方向性が見出された。個別性の探求は、個へと閉じた知見に留まるのでは必ずしもなく、属性や経験を異にする他者との間に新たな共同性を紡ぐ契機となりうる。

1. はじめに——ガーナ人、あるいは個別の存在としての語り手

質的研究は、量的には把握することの難しい、感情や意味、感じ方などの主観的で動的、あるいは相互作用的な事象を扱う方法として発展してきた。中でも一つの事例、一人の語りを深く掘り下げる質的研究は、特定の出来事や事象について、その状況を実際に生きる個人の視点から理解するために有効な方法である。これまで移民、ジェンダー、サブカルチャー、差別問題、教育、医療などのさまざまな領域で個別事例を扱う質的研究が実施され、経験を当事者の視点から理解するための重要な知見が生み出されてきた。

ただし、そうした研究における「個」の意味や、個別性に着目することで得られる知見の学術的意義は必ずしも自明ではない。個別事例を扱う質的研究において、個人はそもそものような存在として位置付けられているのだろうか。特定の集団についての理解を深めるために選ばれた一事例なのだろうか。それとも、固有の人格を持つ一人の人間全体を見ようとしているのだろうか。このような問いへの回答については、後述するように、質的研究者の間でも異なる見解が存在する。

集合と個の関係をめぐる問いに、筆者は自身の研究過程で直面した。筆者は以前、ガーナの農村部で調査のためにインタビューを行っていた。聞き取りの対象は、1980年代の政治変動期にガーナ北部農村部で生じた民衆運動において、当時コミュニティレベルで指導的立場にあった人々である。筆者が調査を行ったガーナ北部農村部は、植民地支配以前の奴隷貿易の時代から他民族による支配と搾取に遭い、植民地支配時期から独立以降も、意図的な低開発政策によって周辺化されてきた地域である。そして1980年代の民衆運動は、周辺化されてきた北部住民が、左翼的軍事政権の「草の根民主主義」政策に便乗しながらその政策を解釈的に利用し、住民主体性を発露させた現象としての一側面を内包していた（近藤2024）。

集合行為の指導的立場にあった人々への聞き取りにおいて、筆者は当初、共同体の規範を強く内面化した発話を想定していた。従来、アフリカ地域研究や文化人類学では、「アフリカの伝統的な社会では、個人の内面と外面、即ち個人の人格や心理と外的な公の社会生活とが極めて強く一体化して」というと説明されてきた（小馬 1992: 165）。このようなモデルにおいて、個人は地縁・血縁の集合体に深く埋め込まれており、その成員であることを離れては自己意識を持ち得ないとされる。

こうしたアフリカ農村部への既存の認識に反して、研究参加者のライフストーリーに強く表れていたのは、共同体の論理を相対化する自我であった。例えば研究参加者の一人は、コミュニティでの幼少期について「閉鎖的」だったと振り返った。身体的強度や家畜を世話した経験などが強い影響を持つヒエラルキーの中で彼は立場が弱く、「他の人々が私に代わって私の人生を決めなければならず」、自由に人と「つるむ (associate)」こともできなかった。コミュニティのはみ出し者で、役割が与えられなかったために行く機会を得た小学校で能力を開花させた彼は、優秀な成績によって進学之机を得、進学先の学校でキリスト教同盟など様々な学生団体に出会う。そこで、生まれと同時に埋め込まれた集団ではなく、理念や価値観に基づいて結成される「組織 (association)」の可能性に開眼する。それが彼の人生において、後の民衆運動の母体となる青年グループの結成へと内的に結びついていた。共同体の論理の内面化ではなく、むしろ、彼らが成長の過程で経験した、個人的な被抑圧体験や共同体への違和感が、後の行為の主観的源泉となったのである。

こうした語りは、「ガーナ農村部住民」や「運動行為者」という集団に一般化できるものではない。むしろ、そうした集合から逸脱する、固有の人格を持つ個人として彼/彼女を際立たせる。そしてそうであるからこそ、その語りは、生まれ育った環境の違いを越えて、聞き手である筆者に強い印象を残した。一人の語りを深く掘り下げる質的研究において、語り手はこのように、調査対象である集団の一事例であると同時に、固有の存在として調査者の前に立ち現れる。本稿では、このような集合と個の関係に焦点を置き、個別事例を対象とする質的研究において個とは何か、また、個別性に着目することが学術的にいかなる意義を持つのかを検討する。

2. 質的研究における個への着目

自己や他者を集合的に捉える視点は、カテゴリー化を伴って成立する。カテゴリーをここでは仮に、対象を同定し、特定の類型として認知する枠組みと定義しよう¹。個人をその固有なパーソナリティに基づいてではなく、カテゴリーに還元して集合的に把握する視点は、分野を横断して社会科学の方法に広く見られる。前章で触れたような、個は構造や社会に拘束されるという構造機能主義は、文化人類学の伝統的なモデルである。このモデルにおいて「他者理解」とは、その他者が属すると研究者によって認知されるカテゴリーについての集合的な理解と同義である。文化人類学者の青木保は、アルフレッド・シュッツの論文集である『文化人類学叢書 現象学的社会学』の冒頭部分において、「異文化理解の基礎理論」という短い論考を記載しているが、ここではシュッツの理論は、「他者理解」ないし「異文化理解」の基礎理論に貢献するものと位置付けられている。「他者理解」が「異文化理解」と言い換えられるとき、「他者」とは「異文化」、つまり、研究者が属する世界とは大きく異なる認識構造や固有の歴史をもつ生活世界として、あらかじめ差異化され、集合的に捉えられている。社会学でも、人類学の構造機能主義的なモデルに影響を与えたデュルケーム社会学に、そのような個と集合の関係を見出すことができる（松田 2002; 小田 2009）。

一方で、歴史研究におけるオーラリティの台頭や、カルチュラルスタディーズ、ポストモダンといった思想的潮流と共に、均質化された範疇から、多様な個性を持つ一人ひとりの人間をみようとする動きも出てきた。そこではマクロな政治経済から日常微細な生活世界へ、集团的運動から個人の行動へ、あるいは「上から」ではなく「下からの」視点へと、歴史と社会を見る視点の転換が要求された（松田 1997: 280）。日本では社会学者、中野卓の研究が、個人に着目した研究の先駆けとして挙げられるだろう。中野は、公害問題についての調査で出会った一人の高齢女性の語りをもとに書かれた『口述の世界史—ある女の愛と呪いの日本近代』（中野 1977）に代表される、個人を対象とした研究を実施したが、その問題意識は、類型からはみ出る個性をどう学問的に扱うかということにあった。「個人の社会学的調査研究について」（中野 1981）という論文で中野は、従来の研究においては個々人が、特定社会や集団、特定の層、あるいは性別、年齢別、職業別、階層別等のカテゴリー毎に一束ねにして扱われてきたことを指摘し、「個性あり、自立性もある創造的行動主体たる人間個人の持つ推進力」に注目することで「既存の人間類型を立て替えて、個人についての新たな諸典型を提示する」必要があると述べている²。

¹ この定義は片桐（2006:10）による「カテゴリー」の定義を参考にしている。定義にも表れるように本稿では、カテゴリーと類型を、文脈に応じてどちらも使用する。片桐（2006）によればカテゴリー論とは、自己や集合体や社会を生み出す「カテゴリー化の作用」に焦点を当てるもので、その理論的基盤はシュッツの類型論、シンボリック相互作用論、エスノメソドロジー等、複数にまたがる。これを踏まえ本稿ではカテゴリーを、類型論も含む言葉として用いる。

² 中野による個人研究を批判的に継承してライフストーリーの方法論を構築した社会学者の桜井厚は、中野の個人研究の方針を一層徹底しようとした。桜井は、中野が「せっかく一人の個性の人間を見ていながら」（桜井・西倉 2017: 84）、それを「新しい人間類型」に結びつけたことは、本来のねらいに照らせば誤りであるとする。そして一人ひとりの生き方のなかに、困難や生きづらさの様々な打開策を見る

それまで均質化して捉えられてきた集団内部の異種混濁性を明らかにする視点は、共同体の抑圧から個人を解放する視点を提示してきた。一方で後述するように、搾取や抑圧、差別などの問題に取り組む文化人類学あるいは社会学的研究領域では、個の強調が、連帯や共同性の形成を困難にし、構造の変化のために働きかけたり抵抗したりする集合的な力を弱体化させるのではないかという警戒もある。個人をどのように捉えるのか、そして、個別の経験の探求にどのような学術的意義があるのかを検討することは、個別事例を扱う質的研究の知見の意義を考える上で、避けることのできない問いである。

3. なぜカテゴリーが重視されるのか？

中野が個人研究の可能性を論じてから数十年が経過した現在でも、質的研究全体としては、個人や個別事例をカテゴリーに還元して扱う傾向は続いている。その理由としては二つの側面が考えられる。第一に、事例をカテゴリーと結びつけることで、そのカテゴリー「についての」知見として一般化可能性が説明しやすいという方法論的次元がある。第二に、知見の社会的インパクトに関わる観点である。以下、この二点について次節にわたって説明する。

まず方法論的次元についていえば、質的研究の一般化可能性は長らく量的研究におけるそれを念頭において議論されてきた。近年では、質的研究の知見の一般化可能性を量的研究と区別するべきという議論が主流になっているものの、一つの事例に基づく知見が一般性や普遍性を持つと主張することができるのはどのようにしてかという点に関しては、いまだ議論の途上にある³。

個別事例の一般化可能性についての説明の一つは、類型あるいはカテゴリーを媒介する説明である。ここでは、アルフレッド・シュッツを土台として社会科学という営みの認識論を分析している高艸賢による説明を取り上げる。高艸は、一つの事例は類型と結びつけられることを通して一般化されると説明する。事例研究とは、特定の「あるひとつの S」を普遍的な「S 一般」の特殊例とみなす「特称判断」という形式をとっており、個別の各 S は特殊例として普遍的な類型 S と結びつく（高艸 2023: 234）。一人の個人や一つの事例を扱っていても、研究者がそれを研究で扱おうとするのはその事例が何らかの類型に属しているからであり、その研究を通して得られた知見は、その事例が属する（と研究者に判断されている）類型概念と結びつけられることで、一般性ないし普遍性を持つと説明される。「A さんは移民という類型に属する事例なのであって、A さんのことをどれほど深く知ることがで

とき、それは当事者である無しに関わらず「誰にでも共通する」ものとしての生き方の手がかりがあると説明している。

³ 質的研究では、一般化可能性自体ことさら主張する必要はないという考え方も存在する（大谷 2019: 88-89）。質的研究方法論を専門とする大谷（2019: 131）は、質的研究にはいまだに、必要で有効な説明を欠いていることがあり、なぜ小さな n の個別や具体の中に一般性や普遍性を見出せるのかを説明することは質的研究者に課せられた課題であるとしている。

きたとしても、このことは変わらない」し、「Aさんの経験や語りもまた類型という観点から扱われる」(高艸 2023: 35)。

この論理は、類型の典型からはみ出る特徴を持つ事例の一般化可能性に対しても有効である。事例研究の知見は、自然科学におけるような統計的一般性ではなく、類型的一般性を持つと考えることができると高艸(2023)は述べる。つまり対象は、類型に典型の事例である必要は必ずしもなく、むしろ、類型の典型からはみ出る特徴を有し、それゆえに統計的一般性においてはとらえられない事例を扱うことは、質的探求を通して類型的理解を進展させるという意義を持つのである。

シュッツのいう「類型」にしろ、認知社会学などで使用される「カテゴリー」にしろ、一義的な枠組みではなく、修正に開かれた相互作用的で生成的な側面を持つ(シュッツ&ルックマン 2003=2015, 島袋 2023; 片桐 2006)。この観点から言えば、中野(1977)が「奥のオバアサン」の語りを「反公害住民」の一事例ではなく、「日本近代を生きる人間」として広い文脈に位置付け直したことも、「反公害住民」も「日本近代を生きる人間」もカテゴリーであることに変わりはないことから、類型的理解を刷新していると捉えることが可能ではある。ただし、両者を単にカテゴリーの大小の違いとして捉えると、「個性ある人間」を「特定社会や集団、特定の層、あるいは性別、年齢別、職業別、階層別等」のカテゴリーへ還元することに対する中野の問題意識は見えづらくなる。「奥のオバアサン」という個性ある個人の物語を通して「日本の近代」を捉えようとしたねらいには、公害問題の直接の当事者カテゴリーを越えて、その経験が広く共有されることが含意されていたと考えられる。このようなカテゴリーの「越境」が持つ意味については、5章以降で掘り下げる。

4. 個別性への着目は共同性の形成を阻むのか？

個がカテゴリーに結びつけられる傾向に関与すると思われる二つ目の側面として、想定される帰属集団の共同性の形成に寄与するという意義が含意されている点が指摘できる。人類学者の松田素二は、個の強調が従来の共同体を脱構築することによって共同性の形成が困難になる問題を、「構造的弱者の共同性問題」(松田 2010: 43)として論じている。人々のクレームが現実には有効な社会的な力をもつためには、その主体はばらばらの個ではなく集合的な存在でなければならない。一方で、共同性の構築は常に本質主義化の緊張をはらんでいる。松田は、ポストモダン人類学やポストコロニアリズム、カルチュラルスタディーズが、均質化された共同体や被植民文化を脱構築するために促進した「異質化の語り」が、植民地支配という暴力の経験や、構造的強者と弱者の非対称性を見えなくすると指摘しており、これを「異質化の罨」と呼ぶ(松田 1997: 280)。

同様の問題は社会学においても議論されてきた。例えば中野や、その方法論を批判的に引き継いだ桜井厚の研究が集団内の多様性や、集団の典型的な語りからはみ出る個の語りに着目したことに対して、同じようにライフストーリーや生活史研究を行う他の社会学者か

らは次のような疑問が投げかけられた。それは、各事例の個性への過度な注目が、当事者同士の繋がりを再び解体することになるのではないかという問題提起である（足立 2003）。その背景には、当事者の語りをその当事者集団に共通する経験として一般化し、一つのストーリーを作り出すことで問題や経験が可視化され、連帯が形成されてきたという文脈がある。

特定の問題の当事者の経験を、当事者以外の人々にも通じる経験として一般化することには、「感動ポルノ」に陥る危険も指摘される（好井 2022）。これについて考える上で、「見た目」問題を研究する社会学者の西倉実季（2017）で紹介される興味深い事例を参照したい。この論文には、円形脱毛症当事者であり、自身の病気をギャグ漫画の形で表現する女性漫画家の小豆だるまさんが登場する。西倉と小豆さんは、『顔ニモマケズ —どんな「見た目」でも幸せになれることを証明した 9 人の物語』（文響社）（以下、『顔ニモマケズ』）における「見た目」問題当事者の経験の扱われ方について意見を交わす。西倉は、当事者の経験はあくまで「見た目」問題の経験として語られるべきであり、「究極的には別に、見た目問題の人でなくてもいい」ような教訓の引き出し方は「当事者の『消費』」ではないかと同書への違和感を表明する。これに対し小豆さんは、「私の個人的な体験」の中に「普遍的なものを乗せ」ることによって「必ずしも体験を共有しているわけじゃない人が読んでも、自分に通じるものとして読める」のが「理想」の伝え方であると述べる（西倉 2017: 18）。

小豆さんは「円形脱毛症患者」を理解するためだけでなく、自分と異なる経験を持つ誰かの生き方と共振するものとして自分の経験が共有される可能性を肯定的に捉える。これに対して西倉が「消費」という言葉で表現したのは、当事者の置かれた固有の文脈や状況の軽視によって可能になる安易な一般化への警戒である。同じく「見た目」問題を研究する矢吹（2018）は、多様な経験を持つ読者の共感を喚起するような書き振りは、その問題に多くの人の関心を向けさせる意義を持つ一方で、「見た目」問題固有の悩みを、普通の人のありふれた悩みと地続きだと示すことによって、差別的な社会を温存することにつながりかねない」と指摘する。

これらの議論に示される通り、個別の語りが特定のカテゴリーや属性と結び付けられることには、カテゴリー同一性に基づく共同性の形成を促し、当事者集団の連帯、ひいては構造的課題に対峙し抵抗する集合的な力を持つことを可能にするという意義が含意されている。これに対し、個別性の強調による「異質化の語り」は、当事者集団を解体し、連帯を弱体化させるとして、共同性形成と対立的に捉えられている。個別性への注目は、人々の連帯や共同性を阻み、他者との繋がりを生まない、個に閉じたアプローチなのだろうか。それとも、カテゴリー同一性に基づく共同性とは異なる方法で、他者との間に新しい紐帯を形成する可能性を持つのだろうか。

5. カテゴリーを越境する他者理解

ここまで、個をカテゴリーに結びつける傾向を支えるものについて考察した。以下では、

他者を特定の社会的・文化的カテゴリーに還元しない理解のあり方とその意義について考察する。そのために取り上げるのは、岡真理の「知の地方主義を超えて一新たなる普遍性に向けて」(岡 2001) という論考である。この論考の中で岡は、異なる社会に生きる他者の経験を、文化の隔たりを超えて「普遍的な経験」として引き受けることの可能性について論じている。論考で取り上げられるのは、スーダン人作家タイプ・サーレフによるアラビア語文学『北へ還りゆく季節』と、その邦訳者による日本語解説である。小説の舞台はイギリスからの独立前後のスーダンであり、二人の主人公が登場する。主人公の一人、ムスタファー・サイードは、イギリス植民地支配下のスーダンにおいてずば抜けた才能を見出され、教育を受けてイギリスで経済学者として社会的成功を収める。一方で白人の女性たちを次々に誘惑して自殺に追いやり、最終的に結婚した白人女性を手にかけて裁判にかけられる。懲役後スーダンに戻り、ゆかりのない村で妻を娶ってひっそりと暮らしていたムスタファーは、もう一人の主人公、ロンドンで学位をとり7年ぶりに故郷に戻った「私」に、自らの過去を語り、その直後、自殺か事故か、氾濫したナイルの洪水に飲み込まれて死ぬ。

この作品について邦訳者は、東西の葛藤劇は「舞台まわし」にすぎず、ナイル河畔の豊饒な生にこそ「真実の劇」があると解説した。これに対して岡は、作品をアフリカ・アラブ文化の固有性において解釈することは「文化本質主義的な読み」ではないかと疑問視する(岡 2001)。「ラスコーリニコフ」や「ジュリアン・ソレル」といった西欧の物語やその主人公の名が、「ロシアやフランス、ドイツといった社会の歴史的、文化的規定性を越え、ナショナルな境界をも越えて」「葛藤する人間存在のひとつの類型、人間が普遍的に抱え持つ問題を体現する人物」として共有されるのに対し(岡 2001: 265)、「ムスタファー・サイード」という固有名詞は共有されず、「特殊な社会の特殊な経験」(岡 2001: 270)としてしか読まれないのはそもそもなぜか。

岡の問いが示唆するように、他者を、その他者が属すると外から判断される文化的・社会的カテゴリーに還元し、そのカテゴリーの固有性において解釈しようとすることは、彼・彼女を「我々とは異なる存在、集団、社会」として差異化し特殊化する態度へとつながりうる。他者の経験を差異化し特殊化する認識がなぜ問題になるのか。岡が邦訳者の解説を「文化本質主義」ではないかと警戒した背景には、文学の世界における西欧中心主義への批判がある。アラブ・アフリカ文学と英文学に対する読みの態度の違いは、我々が無意識に特定の文化や価値規範を普遍化したり特殊化したりする、現実認識の再生産と結びついていると岡は指摘する。岡の問いは、「異文化理解としての他者理解」が孕む政治性を浮き彫りにしている。

では、代わりにどのような読みを岡は提案するのか。先の論考において岡(2001)は、この作品のテーマは「植民地主義支配の暴力」であるとする。そしてその暴力の記憶は、「帝国の支配者たちによってもまた深く分有」されており、従ってそれは帝国側に立つ「私たちの物語」でもあるはずだという。岡はまた、次のように述べる。我々は「ある地域についての特殊専門的な知識を得、その社会についての理解を深めるため」ではなく、「人間存在の普遍的な経験や問題、それらの経験の分有者としての私たち自身、そして私たちが生きるこ

の世界を理解するために」ムスタファーの物語に触れることができる（岡 2001:269）。そうするとき我々は「私たち自身のうちに、ムスタファー・サイドを見出すこと、私たち自身が解くべき問いとしてムスタファー・サイドと格闘すること」になる（岡 2001:289）。

6. 「当事者」とは誰のことか？

「植民地主義支配の暴力」が「私たちの物語」でもあるとは、具体的にはどのようなことを意味するのだろうか。『北へ還りゆく季節』の舞台であるスーダン、イギリスの植民地であり、植民地主義支配の支配者と被支配者は直接的にはイギリスとスーダンである。しかし岡は、日本人がマジョリティと想定される読者層に対して、それは「私たちの物語」でもあるはずだという。これを理解するためには岡が、植民地主義の当事者性をどのように捉えているかを踏まえる必要がある。岡は以前に、慰安婦問題の当事者性をめぐって社会学者の上野千鶴子と意見を対立させているが、その論争における岡と上野の意見の相違の一つは当事者性の捉え方にあった。見解の相違は、「慰安婦」連行が強制であったかどうかをめぐって、在日朝鮮人である徐京植が、「植民地支配それ自体の強制性」を問うべきとしたことへの反応に表れた。上野は、「植民地支配」とは植民地の女性が負った被害であって、「慰安婦」問題を「植民地支配」の枠で語ると日本人「慰安婦」が受けた被害を問題化することができないと述べた。これに対して岡は、植民地支配を問題にすることは、「植民地」という地理的外延の内部に議論を限定することではなく、帝国主義の社会や政治イデオロギーの問題として考えることであり得るはずだと反論した（岡 2019）。

ここでの岡の問題提起は、当事者性それ自体を脱構築するポストコロニアリズム・フェミニズムの観点からの問いとして理解することができる⁴。近年、植民地主義という概念は、歴史上の宗主国・植民地支配関係に限定されない、目に見えないあらゆる支配関係を知的営為として、教育学や開発学を含む多様な領域において援用されている（小玉 2020; 北野 2024）。岡が「知の地方主義」という表現で問題化するのは、他者理解が、特定の社会や文化「について」の理解として完結してしまい、自己理解へと折り返す視点が欠如したあり方であると考えることができよう。そして「新たな普遍性」という言葉は、岡の批判する西欧中心的普遍主義とは異なる、もう一つの「普遍性」を意味している。それは、他者が経験する暴力の記憶を、自らが生きるこの世界、あるいは、自分自身が潜在的に分有するものとして引き受ける者が、ネイションの同一性を超えて繋がりあう、開かれた共同性を志向する

⁴ 岡はパレスチナ問題とサイドの関係についても同様に当事者性を脱構築する。「彼がパレスチナ問題の当事者であることは確かなんだけど、パレスチナ難民を代表して語ることはできない、でも、できないから語ってはいけないということでもない。もちろん私たちもパレスチナ人でも難民でもない。だからと言って当事者ではないと言えるのでしょうか」（岡 2010: 199-200）。また類似した議論として橋本（2018）では、スピヴァク（1988=1998）の「サバルタンは語るができるか」という象徴的な問いが発話者の位置性（ポジショナリティ）への自覚、自省を促すと同時に、発話者に「沈黙」を要求しておらず、「女」や「民族」などのカテゴリー同一性を「当事者」と同一視もしていないことが指摘されている。

(岡 2008)。

ここで、岡の「知の地方主義」に対する批判が、アラブ世界固有の歴史や社会、文化についての知識の軽視を意味しないことを強調しておきたい。岡の議論は、ムスタファー・サイードの経験が「アフリカ」や「アラブ」の事例としてではなく、読み手自身やこの世界に関わる経験として捉えられるような読みの態度の可能性について論じる内容であった。同時に岡は、アラブの小説の日本語訳に誤訳や不正確さが散見されることは、欧米の文学を対象とするときに当然要求される厳密な専門性が要求されないという「知の二重基準」の問題を示しているとする。そして「知の二重基準」がもたらす、アラブやアフリカに固有な知識や知見の相対的乏しさが、西欧＝普遍、アラブ＝特殊とみなすような認識を再生産しているのではないかと指摘する(岡 2001)。

この岡の議論は、特定の集団や社会に関する知識の薄さや厳密性の低さは、そのカテゴリーの差異化と特殊化を促進する恐れがあることを意味している。逆にいえば岡の議論において、同じカテゴリーに属しない他者の経験を、自分自身に関わる経験として捉えようとすることと、特定のカテゴリー「について」の理解を深めることは対立的に捉えられてはいない。他者を取り巻く歴史・文化・社会に関する詳細で正確な知識は、他者の固有な状況、文脈を無視した暴力的な一般化に陥ることを避けるために重視されるべき要件であるといえる。

以上のように、岡が他者を差異化・特殊化する理解のあり方を批判した背景には、植民地支配の当事者性を広く捉えようとする問題意識があった。特定の問題が狭義の「当事者」の境界を越えて共有され、より広範な連帯へとつながる可能性を考えるためには、カテゴリー内部に限定された理解という、閉じた他者理解のあり方からの転換が求められる。

7. カテゴリーを「越境する」ための問題構成

岡の議論からは他者理解の二つの方向性が示唆された。他者を「我々とは異なる存在、集団、社会」として差異化し特殊化する理解の仕方。もう一つは他者の経験を、自らを含むこの世界や、自分自身が潜在的に分有するものとして理解する方向性である。岡の論考は、文学作品の読みを対象としているものの、そこで問われる「対象をどのように理解するか」という問題は、他者を集合やカテゴリーにおいて捉えるのか、それともカテゴリーの特殊性に還元されない個別の存在として捉えるのかという、質的研究における個別性の扱いに関する議論への示唆に富んでいる。

ここまで論じたように、特定のカテゴリーに還元されない個への注目、既存の共同体内部の差異を強調する一方、同じ社会や集団に属していない他者同士の間新たな共同性や紐帯を形成する可能性を持つ。岡の議論を踏まえればそれは第一に、他者理解を自己理解へと折り返すこと、第二に、問題の当事者性を広く捉えることによって可能になる。そして岡の議論においてこの二点は切り離すことができない。岡は、『北へ還りゆく季節』の登場人

物の経験が、人間が普遍的に抱え持つ問題として共有されるためには、「ムスタファー・サイド」という固有名が、「スーダンやアラブという民族的、文化的境界を遥かに越えて、植民地主義支配の暴力をその身に刻印されて生きざるを得ないこの世界の一つの類型を普遍的に表す特権的な名」として記憶されなければならないと述べる（岡 2001: 282）。岡はこのように「植民地主義」をキーワードとして、その当事者性を拡大することによって、ムスタファーの物語を「普遍的な問題」として捉えようとする。

ここで改めて、カテゴリーと個という主題に立ち返りたい。岡の議論においてムスタファー・サイドを理解する方法は確かに人種などのカテゴリーへの還元を免れてはいる。ただしそれは、固有の人格を持つ彼という人間について理解するというよりは、「植民地主義支配の暴力をその身に刻印されて生きざるを得ないこの世界の一つの類型」を前提とした理解である。ムスタファー・サイドは、植民地支配という主題を体現する存在、目に見えない支配構造を暴露する存在としてあらかじめ規定されている。実際、ポストコロニアリズムやフェミニズム研究では、個別の事象を政治化する共通した枠組みに基づき、抑圧や権力関係、隠された暴力が記述されてきた。こうした研究は、文化的・社会的境界、さまざまな立場の違いを超えて、類似した抑圧や支配の経験を有する他者同士を結びつけるという意味で、カテゴリーを超えた他者理解を、一定の枠組みのもとで可能にする。

一方で、構造的暴力の犠牲者（あるいは気づかずに再生産している加担者）として他者を位置付ける論理がはらむ問題については、「意識化」や変革的主体性の形成を目指したフェミニスト・ペダゴジーやクリティカル・ペダゴジーへの批判が思いおこされる⁵。構造的な暴力に「気づいていない」、あるいはそれが「見えていない」者（読み手や対象）と、それに「気づいている」、それを「知っている」者（研究者）という非対称性がそこには前提されている。

なぜそのような非対称性が問題になるのか。それは、意味づけや解釈が特定の問題構成のもとであらかじめ方向づけられることで、ナラティブへの偶発的な共感を通して、カテゴリーを同じくしない個人と個人が紐帯を形成する可能性が妨げられる可能性があるためである。「植民地主義」や「支配」という問題構成は本来、個人の日常生活における経験や実感に対して意味を持つことで、異なる経験を持つ人々を結びつける有効な枠組みとなる。しかしそれが一旦、「気づかれるべき」「学ばれるべき」真理として位置付けられると、個人的な実感に根ざす共感を經由することなく、他者の経験を一方的に規定する恐れがある。

そこで最後に、「越境」を可能にするもう一つの可能性について若干の考察を行いたい。一つ目の方法は、岡が示唆したように、特定の主題を「普遍的な問題」と捉えることで当事者性を拡大する方向性であった。これに対して、カテゴリー同一性を前提にするのではなく、また、特定の問題構成を当てはめるのでもない形で、他者の経験が了解されるためには、ど

⁵ 例えば虎岩（2023）は、これまでのフェミニズムの行き詰まりについて、「同じ抑圧を経験している」という前提がさまざまな差異を消去すると同時に抑圧の再生産に繋がったことを、ベル・フックスなどに依拠して論じている。また市川（2008; 2012）は、ヘンリー・ジューのクリティカル・ペダゴジーに寄せられる「ビジョンの一方的な押しつけ」という批判について論じている。

のようなあり方が可能だろうか。具体的な例として次章では、村上靖彦による「触発」という概念を取り上げる。村上の研究対象領域は、看護、医療、自閉症、社会的困窮地での子ども支援など多岐に渡るが、いずれかのカテゴリーについての理解が目指されているわけではない（例えば看護師の経験を扱っていても「看護研究」というわけではない）。むしろ後述するように、同じ経験を有しているわけではない他者の経験が了解可能となるような普遍性を論じていることから、他者理解におけるカテゴリーの越境という本稿のテーマに合致しているといえる。

8. カテゴリーを「越境」するもう一つの方法

村上は現象学的方法を採用して、一人ひとりの経験を内側から描く分析を行っている。分析によって取り出そうとするのは、「経験の布置」であり「構造」である。例えば村上は、死産した子どもを産湯に入れる看護師の以下のような語りを引用している。

「[...] で、あの、産湯に使って（ママ）、ふわーって浮かんで、「ちょっと泳いでみようか」ってびゅーってしてると、ほんとに赤ちゃんが穏やかな表情で、あのお地藏さんみたいなかわいい表情になって、そういう表情を見てると私たちが、すごくなんか「うー」ってなってる気分が少し、気持ちが楽になるんですよね（村上 2015: 559-560）（括弧内は筆者）。

この引用された例の擬態語に現れるような、経験のいきいきとした「動き」こそが「現象」とすると村上はいう。「動き」としての現象それ自体は、個別の事例の中の一過性の事象であり、目に見えない、捉えることができないものである。そこで村上は、現象そのものではなく、現象が成立する個別の文脈の「構造」をあぶり出そうとする。それによって、その「構造」の中で生じる状況の動きが語りとともに伝達され、読み手の「心を打つ＝触発する」と説明する。この「触発」概念が村上の現象学において、単独の経験が普遍性と結びつく論理の核となっている。

いうまでもなくここでいう「構造」とは、主体から独立したシステムや支配関係ではない。それはストーリー（物語）を規定する要素の配置や要素間の関係性というべきものである。例えば村上（2015）は、『摘便とお花見』（村上 2013）を読んだある看護師が「自分に通じる経験」を見出した例に触れている。ここで読み手が共感したのは、「看護師になりたくない」という強い否定の思いの保持が、逆説的に、後に「看護師になる」ことを「準備する」、という経験の構造であった。このように村上による現象学的還元では、主体の経験や心の動き（＝現象）をもたらした経験の布置としての構造を取り出し、明らかにすることで、その構造を媒介して、それを経験していない読み手の中にも心の動き（＝現象）が生起することが想定されている。「触発」とは、経験の布置を媒介して二つの個別の「動き」が成立する

ことであり、どちらの「動き」も、固定化されたり規定されたりはしない。それゆえに、「触発するかどうか」「意味を持つかどうか」という不確実性が生じることになる（村上 2015: 563）。

このことから次のことも導かれる。読み手は、テキストに書かれている他者の経験を読んで心が動いた時＝触発された時はじめて、自分にとってそれが何らかの意味を持つことを認識しうる。それが、自分とは全く異なる文化的・社会的状況に生きる他者であったとしても、その他者の経験が自分の生の経験や感じ方と響き合う時、読み手は、自分の中に、文化的・社会的境界を超えて、その経験を了解しうる有意性があることに気がつくのである。村上は、自分とは異なる状況、実践、困難についての他者の経験を了解することが可能になる背景には、「他者の経験が潜在的には私の経験でもありえた」という地平があると述べている（村上 2023: 106）。「人間が人間である限り、どのように異なる文化に生まれつこうとも、どのような病や障害をもとうとも、どのように異なる偶然の出来事や状況を引き受けようとも、最終的には理解し尽くせないとしても、それは「私にも起こり得た経験」である」（村上 2023: 107）。

なぜその人がそういう行為に至ったかを、その人が属する集団や役割、構造的位相などに還元して理解する場合、その理解はどのような読み手にとっても同じように（その意味で普遍的に）なされる。それに対して、「触発」するかどうかはカテゴリー同一性によっては保証されない。しかしそうであるからこそ「触発」は、特定の状況や構造、役割を共有しているわけではない者同士の間にも生起しうる。それは他者との間に新たな了解可能性の回路がひらく瞬間であり、カテゴリーを越境するもう一つのあり方である。

9. 結論

本稿では、個別事例を扱う質的研究における「個」の意味について検討した。個をどのように捉えるか、個別性に注目することにどのような意義があるかについては、質的研究の間でも様々な議論がされてきた。本稿では特に、個への注目が、共同体形成と対立的に論じられてきたことを踏まえ、カテゴリーに還元されない個別性への着目が、どのように他者との結びつきを可能にするかを考察した。そのために岡の議論を参照し、他者を、集団や属性「について」の理解において把握する「カテゴリーへの還元」と、同じ経験や属性を共有しない他者の経験を、自分が分有するもの、自分の経験でもあり得たものとして引き受ける「カテゴリーの越境」の二つの方向性の違いを確認した。この二つの方向性は必ずしも相反するものではなく、他者を取り巻く文脈や状況の固有性や具体性を理解しつつ、同時に、他者理解を自己理解へと折り返す態度として重要であることが示唆された。本稿の検討から、類型的一般化に還元されない個別性への着目は、個へと閉じた知見しか生み出さないのではなく、明示的あるいは客観的な共通点を有するわけではない他者との間に共有可能なものを探り、新しい共同性形成への回路をひらこうとする態度であると言える。

岡の議論は、類型的一般化という、中立的・客観的に見える社会科学の手続きが、「自分と異なる他者の問題」として主題を特殊化するプロセスに加担するかもしれないということに注意を促す。今日、虐殺や紛争、気候変動に対するグローバル・ガバナンスの危機や権威主義的政権の台頭が世界で経験されている中で、「普遍的だが異なったかたちで経験される不安定化された状況」(エスコバル 2024: 89) への洞察を深め、他者の経験を「我々が生きるこの世界」の事柄として捉えるまなざしの意義は増しているように思われる。

同時に、当事者性の外延を拡大可能にする論理が、多様な事象を一義的な意味づけへと回収する暴力性を孕む危険には留意が必要である。そこで最後に本稿では、岡が提示したような、特定の主題の当事者性を拡大していく方法とは別の方向性として、個別の存在としての他者の経験を、別の他者が実感に根ざす共感に基づいて了解する可能性を検討した。その具体的な例として、村上の「触発」概念を取りあげた。村上の方法では、当事者の外延を広げる代わりに、「触発」の越境可能性が、経験を共有していない者同士の出会いをもたらす。その成立は不確実性を伴うが、それゆえに、その出会いはカテゴリー同一性や特定の問題構成による統制を免れる。

本稿は認識論的な次元での議論が中心となったが、「カテゴリー同一性に基かない共同性」をより実践的な観点から検討するならば、実際の現象としての連帯、集合行為・社会運動研究との関連についても掘り下げる必要があるだろう。この接続可能性については今後の研究で考察を進めたい。また、本稿では個とカテゴリーという観点から、様々な論者の議論を参照しながら論を進めた。それゆえ、各論者による概念の意味や議論の文脈の違いを丁寧に扱えてはいない。岡の議論と現象学的アプローチの違いを含め、概念間の関係等についてさらに考察を進め、議論を精緻化させることを今後の課題とする。

文献

- 足立重和、2003、「生活史研究と構築主義—「ライフストーリー」と「対話的構築主義」をめぐる」『社会科学論集』40,41 合併号、219-231。
- 市川秀之、2012、「ヘンリー・ジューのクリティカル・ペダゴジーにおける政治理論と教育理論のつながり—押しつけという批判に回答するために」『教育哲学研究』105、69-87。
- 市川秀之、2008、「ヘンリー・ジューのクリティカル・ペダゴジーにおける問題点の提示」『教育論叢』51、17-26。
- Escobar, Arturo, 2017, *Designs for the Pluriverse: Radical Interdependence, Autonomy, and the Making of Worlds*, Duke University Press. (水野大二郎ほか訳、2024、『多元世界に向けたデザイン ラディカルな相互依存性、自治と自律、そして複数の世界をつくること』ビー・エヌ・エヌ。
- 大谷尚、2019、『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会。
- 岡真理、2019、『新装版 彼女の「正しい」名前とは何か—第三世界フェミニズムの思想』青土社。
- 岡真理、2010、「表象暴力への抵抗—パレスチナと共に」本橋哲也編『格闘する思想』青土社。
- 岡真理、2008、「アラブ、祈りとしての文学』みすず書房。
- 岡真理、2001、「知の地方主義を越えて—新たな普遍性にむけて」栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知6 知の植民地—越境する』東京大学出版会、265-286。
- 小田亮、2009、「共同体と代替不可能性について—社会の二層性についての試論 (吉原健一郎教授退任記念)」『日本常民文化紀要』27、260-219。

- 片桐雅隆、2006、『認知社会学の構想—カテゴリー・自己・社会』世界思想社。
- 北野収、2024、「脱成長と脱植民地化に向き合うための条件—ラテンアメリカのデコロニアル論が示唆すること」『アジア・アフリカ研究』64(4)、26-40。
- 小玉重夫、2010、「教育思想史におけるポストコロニアルの視点（第IV部「教育」の彼方へ？—思想史のなかの「学ぶ」「教える」）」『近代教育フォーラム別冊 教育思想史コメンタール』、153-161。
- 近藤菜月、2024、『「革命」を語る—ガーナ農村部の民衆運動』ナカニシヤ出版。
- 小馬徹、1992、「アフリカの教育」、日野舜也編『アフリカの文化と社会 アフリカの21世紀 第2巻』勁草書房、159-187。
- 高艸賢、2023、『シュッツの社会科学認識論—社会の探究が生まれるところ』晃洋書房。
- 桜井厚・西倉実季、2017、「インタビュー 対話的構築主義との対話—ライフストーリー研究の展望」『現代思想』3、60-84。
- Salih, Tayeb, 1966, *Season of Migration to the North*, Beirut journal Hiwār. (黒田寿郎・高井清仁訳、1989、『北へ遷りゆく時／ゼーンの結婚 現代アラブ小説全集 (8)』河出書房新社。)
- 島袋海理、2023、「生きられた経験と類型化は水と油か？ —現象学的アプローチにもとづくインタビュー過程の検討を通じて」『現代思想』51(11)、121-132。
- Schütz, Alfred & Luckmann, Thomas, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, UVK Verlagsgesellschaft. (那須壽監訳、2015、『生活世界の構造』、ちくま学芸文庫)。
- Schütz, Alfred, 1970, *On phenomenology and social relations* (Helmut. R. Wagner, Ed.). University of Chicago Press. (森川真規雄・浜日出夫訳、1989、『＜文化人類学叢書＞現象学的社会学』、紀伊國屋書店)。
- Spivak, Gayatri Chakravorty, 1988, Can the Subaltern Speak? In Cary Nelson & Lawrence Grossberg (Eds.), *Marxism and the Interpretation of Culture* (pp. 271–313), University of Illinois Press. (上村忠男訳、1998、『サバルタンは語るができるか』みすず書房)。
- 虎岩朋加、2023、『教室から編みだすフェミニズム—フェミニスト・ペダゴジーの挑戦』大月書店。
- 中野卓、1981、「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』32(1)、2-12。
- 中野卓、1977、『口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房。
- 西倉実季、2017、「生きるためのユーモア—自己を笑う、病いの日常を笑う」『語りの地平』2、3-24。
- 橋本憲幸、2018、『教育と他者—非対称性の倫理に向けて』春風社。
- 松田素二、2010、「構造的弱者と共同性—京都市在住朝鮮人のライフ・ヒストリー調査から考える」、小田亮編『グローカリゼーションと共同性』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、43-66。
- 松田素二、2002、「個人性の社会理論序説—非西欧的セルフ像をめぐる」『フォーラム現代社会学』1、33-42。
- 松田素二、1997、「植民地文化における主体性と暴力—西ケニア、マラゴリ社会の経験から」山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化—人類学のパースペクティブ』新曜社、276-306。
- 村上靖彦、2023、「すぐ、もうしょっちゅう、ずっと—＜現象学的な質的研究＞と経験のリアリティ」『現代思想』51(11)、98-110。
- 村上靖彦、2015、「現象学的な質的研究の方法論」『看護研究』48(6)、558-566。
- 村上靖彦、2013、『摘便とお花見：看護の語りの現象学（シリーズ ケアをひらく）』医学書院。
- 矢吹康夫、2018、『ジロジロ見ないで』から『顔ニモマケズ』へ『日本オーラル・ヒストリー研究』14、137-149。
- 好井裕明、2022、『「感動ポルノ」と向き合う—障害者像にひそむ差別と排除（岩波ブックレット 1058）』岩波書店。

(こんどう なつき・名古屋大学)